

Kimio Mizuki's World of Washi graph 水木喜美男の世界

和紙グラフ Washigraph

この作品は、手漉き和紙と写真を特殊技術によって融合した、現代フォトアートの新しい姿である。

「和紙グラフ」という名称は、世界に誇る手漉き和紙の素材力、温かさそして美しさを生かした浮世絵に代表される江戸時代の木版画と、欧州の石版画であったリトグラフの味わいを兼ね備えていることによって命名した。被写体は洋の東西を問わず、格調高く保存性の良いものを求めながらオリジナルクラシックフォルムを現代に再現させている。

使用している和紙は最近のインクジェット対応で販売しているものではありません。漉いた和紙そのままにプリントをしています。



作者：水木喜美男 Artist: Kimio Mizuki

【プロフィール】北海道留萌市増毛町出身。川越市在住。グラフィックデザイナー、和紙文化研究会会員

*作品展 2012年8月「秘められた手漉き和紙の魅力ービジュアルなフォトグラフ&書の世界ー」2人展(小津ギャラリー) 2012年12月 コスモス展「和紙グラフ」の新世界(コスモスギャラリー) 2013年1月「和紙グラフ」の新世界4人展(川越市立美術館市民ギャラリー) 2013年12月 コスモス展「和紙グラフ」の世界(コスモスギャラリー)

*寄稿 和紙文化研究 第16号(2008年11月発行) 和紙文化研究会「紙について語る会」デジタル顕微鏡カメラによる繊維分析・和紙文化研究 第18号(2010年11月発行) 和紙文化研究会「インクジェットプリントで、アートが変わる」ー前後1000年悠久なる和紙力の再発見・和紙文化研究 第20号(2012年11月発行) 和紙文化研究会「秘められた手漉き和紙の魅力ービジュアルなフォトグラフ&書の世界ー」展報告及び本企画意図と和紙の可能性

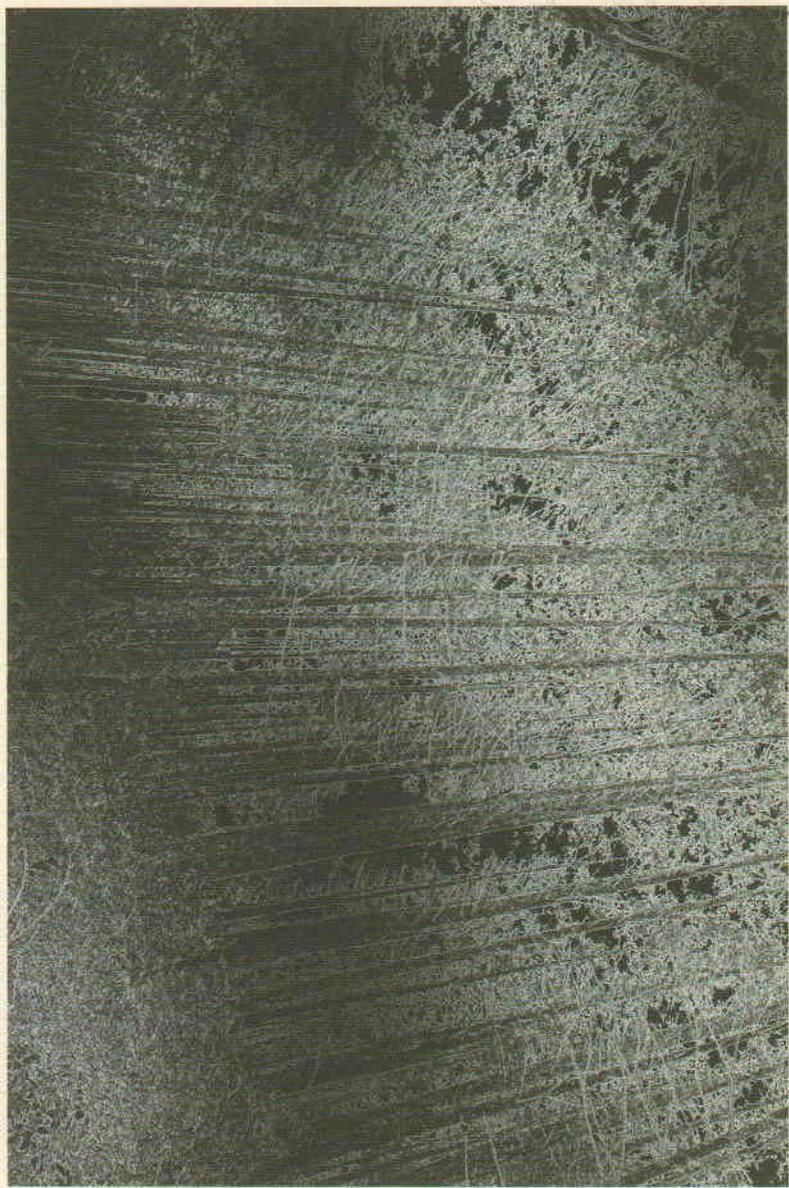


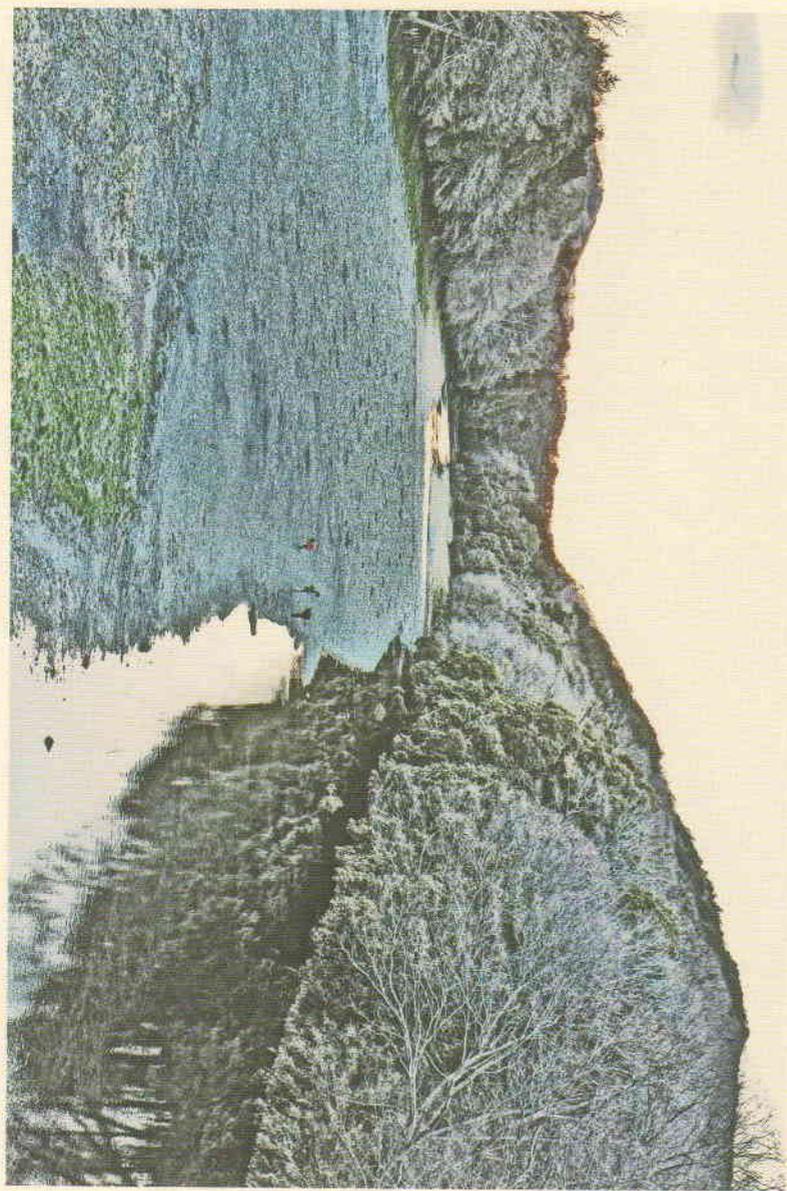


冠水橋風景



冠水橋近くの風景





廣山溪谷ハルニキエー堀岡辺風景



嵐山溪谷



オオムラサキの森

濃い森に囲まれた 嵐山溪谷

水木喜美男
嵐山溪谷撮影と和紙グラフ

取材・文：伊藤公美子
写真：水木喜美男・伊藤公美子
Text: Kumiko Ito /
Photography: Kimito Mizuki・Kumiko Ito

比企郡嵐山町にある嵐山溪谷へは東武東上線武蔵嵐山駅から一時間ほど歩く。この地が「武蔵嵐山」と呼ばれるようになったのは、昭和3年に本多静六林学博士が訪れ、溪谷の景観が京都の「嵐山（あらしやま）」によく似ていることから「武蔵国の嵐山」という意味で名付けられたことによるそうだ。

水木さんが今回の和紙グラフ作品の題材として嵐山溪谷を選んだのは、この地は木曾義仲の生まれたところ、与謝野晶子が巡った地、歌碑があるなど興味のつきないところだから、と言う。「それに嵐山町には我が家の墓があり、その関係で何十回と訪れています。」しかし何十回と来ていても、改めて考えてみると和紙グラフの作品の題材にふさわしい場所

があるのか分からない。気になりつつも、ともかく嵐山溪谷に向けて歩き始めた水木さん。

駅から嵐山溪谷までの道には要所ごとに道案内となる標識が設置されている。水木さんはまずオオムラサキの森、蝶の里公園を回り、槻川沿いを歩いて嵐山溪谷に向かった。

嵐山溪谷は森が濃く槻川の水は澄んでいて、白鷺が舞い、霧囲気がよかった、と水木さんは言う。「溪谷といっても大スケールの感じではないなと感じつつ、いい雰囲気だと思いました。冠水橋まで



冠水橋



冠水橋

くると橋がいい感じで絵になりそうと思
い、狙い場所を探しシャッターを押しま
したね。」森の中はさすがに空気が澄み
きっていたのが印象的だったと言う。岩
畳と槻川の清流が見事な溪谷の景観を作
品にするために、水木さんが気を遣った
ことはどんなことだろうか。「私の風景
作品は冬の枯れた木や、薄（ヌスキ）や岩
肌などが好きで、それらはデータ加工を
するのにも適しています。また、水の流
れや映り込みなども。それで、この小溪
谷をどのアングルで狙ったらスケール感
が出るかなどを考えて作品作りをしまし
た。」

嵐山溪谷の周辺には杉林が広がる。
「感覚的には杉林は非常に好きな世界で
すね。溪谷に入る前辺りの道すがらです
が、かなり深い杉林で傾斜も急で、絵に
なりそうと感じながら狙いました。ここ
は結構木の伐採をしていて、切り株や倒
れているものがあつたりしました。」

溪谷をさらに進むと、昭和の代表歌
人、与謝野晶子の歌碑がある。与謝野晶
子は昭和14年6月、61歳の時に娘の藤子
さんと共に溪谷周辺の旅館を訪れ、溪谷
の自然などをテーマに「比企の溪谷」29

首を歌い上げた。歌碑の表面には比企の
溪26首目の歌として「槻の川 赤柄の傘
をさす松の 立ち並びたる 山のしのの
め」という歌が彫られている。

冠水橋から上流に向かって右手斜面の
林の中を歩いていくとキャンプ場があっ
たが、水木さんはそこで道が分からなく
なってしまった。「そのまま登り進むと
民家に出たので、民家のご婦人に道を尋
ねたところ、親切に教えていただきました
ね。この時はほっとしましたね。ただそ



与謝野晶子歌碑道しるべ

これから武蔵嵐山駅に戻るまで4キロメー
トルあるよ、と言われた時はぞっとしま
したが。」

道を教えてもらい小道を歩いて行く
と、県道173号線に出た。そのまま行
くと武蔵嵐山駅に着くが、その途中に嵐
山溪谷バーベキュー場がある。槻川に架
かる槻川橋の上から川辺を見渡す景観は
見事だ。「武蔵嵐山」と名付けた本多博
士は、この橋の上から溪谷と周囲の赤松
林の美しい景観を眺めて感動したと言わ



嵐山溪谷バーベキュー場

れている。そして水木さんもやはり、こ
こでいい感じのシーンに出会うことが出
来た。「ここでは橋の上から狙いました
が、歩きながら見ていると親子と思われ
る三人が遊んでいました。この大パノラ
マ的な雰囲気のところは三人しかいなく
て、こんなシーンはなかなか無いと思
い撮りました。」

水木さんは現在川越に住んでいる。
「川越駅から嵐山駅までは電車ではそれ
なりに近い距離にあり、嵐山駅から歩く
とお手頃な溪谷感を味わえる場所だと感
じました。旅慣れない私にはこの辺がい
いところか。溪谷までは全て歩きなので
相当キツイ撮影でした。ただ溪谷の周り
は森がそれなりに濃く、水の音、鳥の
声、澄んだ空気は別世界の感があり、ハ
イキングコースとしてもなかなかいいと
ころだと思いました。そして与謝野晶子
も同じ道を歩いたのかと思うととても心
地よい気持ちになり、なんとか歌碑まで
たどり着こうと思いついていましたね。」
今回の和紙グラフィック作品を制作するにあ
たって、水木さんは嵐山溪谷に絞って表
現した。「この溪谷をどう表現しようか、
同じ場所を全く違うように見せるにはど

うしたらいいか。撮ってきた写真の種類
でどう表現出来るかを考えました。」

今回の作品に限らず、和紙グラフィフは
ベースが和紙ありきなのだと言う。「純
粋な和紙にインク表現をしたときに、そ
の滲み具合やどんな色に変化するのかな
どを考え、その和紙の素材の特徴をどう
生かすかを追求しています。」だからイ
ンクジェット対応の表面加工をしたもの
はいっさい使用しない事になっているそう
だ。「和紙を漉く人のところへ取材に行
き、そこで漉かれた和紙を使い、作品作
りをしています。」

また、いいビジュアルを見つけるのも
本当に大変な事と感じている。「和紙を
生かすには、またビジュアルを生かすに
はと両方を考えています。両方を生かせ
て一体になった時に和紙グラフィフが完成す
ると思うからです。」水木さんに和紙
の魅力について聞いてみた。「心休まる
ぬくもりがあり、手触り感、優しさを感じ
ます。」

※和紙グラフィフ作品を誌上販売します。

P 55をご覧ください。

